

くらしナビ 生活スタイル

職場以外の居場所求め

認知症 新時代

第4部 できることある ②



あしたばの集まりで女性スタッフ(右)と一緒に昼食を作る高橋一夫さん(仮名)。料理は不慣れたが、新しい挑戦だ=東京都江戸川区のなぎさ和楽苑で

現役世代を襲う若年性認知症。働き盛りで職を失うと、経済的な問題とともに「居場所」や「やりがい」をどこに求めるかが切実な課題となる。認知症に関する公的支援やサービスは高齢者への対応が中心。若く、体の機能が衰えていない若年性認知症の人

●生活に張り合い 6階のガラス戸を開け放つと、心地よい風が吹き抜けた。東京湾にほど近い、東京都江戸川区の高齢者施設「なぎさ和楽苑」。40〜60代の男女約10人が、テーブルを囲んで昼食の中を華弁を食べる。

ここで週3回開かれている若年性認知症の人の集い「あしたば」。この日の利用者は定員いっぱい6人。昼食の材料の買い出しや準備は、利用者スタッフが一括している。

複数に問い合わせを

自分自身や身近な人が認知症かもしれないと思った時の相談窓口は、自治体などが設けている。ただ、支援制度やサポート団体について十分な情報が得られるかどうかは、地域によって差があるのが現状だ。複数の窓口にお問い合わせ、信頼できる相談先を見つけたい。

全国的に電話相談を受け付けている主な窓口は以下の通り。いずれも通話無料。

◆認知症介護研究・研修大府センター(愛知県)＝若年性認知症コールセンター ☎0800・100・2707(年末年始と日曜祝日を除く10〜15時)。若年性認知症について相談を受け付けている。

◆認知症の人と家族の会(京都市)＝ ☎0120・294・456(土日祝日を除く10〜15時)。携帯電話からは ☎075・811・8418(通話料は有料)。

◆認知症予防財団(東京都)＝認知症110番 ☎0120・654・874(月曜と木曜、10〜15時)。同財団は7月、1992年の開設以来寄せられた相談約2万1000件の記録をデータベース化した。過去の相談内容が確認しやすくなり、継続的な相談にもきめ細かく対応できるようになった。

●「嫌がる仕事でも」 神戸市の菓子卸会社に勤める

たか分からなくなったり、同じ作業を繰り返したりした。だが誰にも相談できず、病院に行こうとも思えなかった。「病気と分かって仕事を失うのが怖かった」と語る。今春、フオークリフトの操縦ミスがきっかけで、会社から病院を受診するよう勧められた。できれば違う部署で仕事を続けたいが、会社側と折り合いがつかなかった。

●「地域社会に貢献」 「あれ、変なおじさんが写っているんじゃない?」

中山行男さん(58)「仮名」も昨年6月、若年性認知症と診断されて休職中だ。人事担当者と上司から休職を勧められた。「このまま仕事ができなくなって給料が減るより、休職して傷病手当を受け取る方がいい」と説明を受け入れるしかなかった。同居する中山さんの母(87)も認知症だ。デイサービスに通う母を朝送り出し、夕方出迎える、身の回りの世話をやるのが日課になった。ようやく親孝行ができるようになった半面、意思の疎通がうまくいかない、つい声を荒らげてしまうこともある。

●「嫌がる仕事でも」 神戸市の菓子卸会社に勤める

だが、それだけでは時間もかけたりする楽しみもある。だが、それだけでは時間もかけたりする楽しみもある。だが、それだけでは時間もかけたりする楽しみもある。

高橋さんは2年前ほど前から物覚えが悪くなったと感じていた。倉庫では大量の書籍を扱い、運んだ本をどこに置いたか、他にはほとんどなかった。高橋さんは2年前ほど前から物覚えが悪くなったと感じていた。倉庫では大量の書籍を扱い、運んだ本をどこに置いたか、他にはほとんどなかった。

高橋さんは2年前ほど前から物覚えが悪くなったと感じていた。倉庫では大量の書籍を扱い、運んだ本をどこに置いたか、他にはほとんどなかった。高橋さんは2年前ほど前から物覚えが悪くなったと感じていた。倉庫では大量の書籍を扱い、運んだ本をどこに置いたか、他にはほとんどなかった。

高橋さんは2年前ほど前から物覚えが悪くなったと感じていた。倉庫では大量の書籍を扱い、運んだ本をどこに置いたか、他にはほとんどなかった。高橋さんは2年前ほど前から物覚えが悪くなったと感じていた。倉庫では大量の書籍を扱い、運んだ本をどこに置いたか、他にはほとんどなかった。

Bを「入れ」で「うに」が